朝夷巡嶋記

第三編

巻三

へ13
704
13

明へ遠
號 704
巻 13

ウエブストル氏
スペルリング 獨學 一冊 日本書記 神代卷 片假名付 小本二冊
サービント氏第一讀 リードル 獨學 一冊 加藤弘之氏著 自初編至四編各五冊完
宮田先生著 早朝戰畧編 合本八冊 近藤先生著 金銀圖錄 彩色入 全七冊
学校專用改点 小學素讀本 二冊 英學之部 横文字獨稽古 折本 壹冊
森先生著 洋算学教名人 一名西洋算術早合点 彩色入の石版にて畫く 全一冊
大阪心齋橋筋 博文寶寺町南入 藪兒書肆 前川源七郎梓

明治三十八年十月九日

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之三

東都 曲亭主人編輯

中輯第廿五

色界の孀婦鳥
欲海の和尚魚

義邦いとその性温順なるか一朝の怒より来りて黒萩を打ちと日来いわらぬ挙動より似られども心ざし正しく非理非義なるを忍びがたく怒ひり。況この君怜悧なれども歳尚二十より足らざるに千慮の一失さもあるべしと程ふ詰旦義邦が疾起く黒萩が氣色をうかがうるよりその歎待日来より変らず。絶て怨るおもちいせもどなか謀ることもあれど一点も心を放さず是より毎日より進止を試るよりもろ得がたきを見るにあらず原来この老女さが一拳より後悔して行状を改めるる歎きうんぬんあるべしと標吉も亦幸ひなん。

尻も結ばぬ紬糸の素もやもれぬ女子と又釋易なれも女子ぬこそとやう
やくよりひとりてさのこゝ懸念せざりけり黒萩ハ義邦を可愛とゆひとれ
よりも憎しとゆゝ百倍ゆもどもさ所遅き老女ゆもびその通宵深念しつ天明て
後ハ聊も怨る氣色を顕さぬ立願のゆありとそこの日より禁酒しとゆうづよ
身の行ひを慎むごとく進止へども所為とゆうハ表裏ぬて指月寺の住持
塞玄ぐ國府より還るを俟ありけりゆる程よこの月廿八日ハ田丸郡内ぐ一周
忌よ當まり出れよりゆ標吉ハ三日已前より山獵せぬ廿七日の逮夜ゆ
づゝ餅を搗く家廚よ供里人ゆも配遣しなどひるび盡ゆく秋の日ハ蘭
うりかくて錢を裹を米を負ひ指月寺よ赴れく留守居の老僧よけの翌の
讀經を誂へ施物を布て墓よ請香華をも向くかゝるさよその日も竟よ暮ぬ
けり。ゆる時ゆも黒萩ハ口をハ人ぐとぬれ細布おぐゝ裳裙長れ衣の

前後を撫るゆを裨もせぬ裨もせぬ。ゆをゆる毎よ果敢とゝ孫ゆ標吉ぐ精悍れを。
おぐゆを共よ日を消せりさてその明朝黒萩ハ指月寺へ詣るとそまづ湯を
沸して項の脂を洗ひおぐし化粧結髪ゆる程よをゆ午ゆありしゝどあれ心のど
やうよ飯をたうべく衣を更やうゆく宿を煉出さり且くして標吉ハ母ぐ脱捨し
舊衣を畳んとそ引揚るよ一聯の珠数そのほとりよ在りとれいゝふとゆよ
とりて背門よ出くをりゝる義邦のほとりよいれれく母ぐ聯て出る隨よ珠数を
遺れていひれ追ふともいおぐ遠くハあゝど。出居よはとゝろつけさせゆくと
いへば義邦点頭くそハよくとそれつけられ現老女の歩ゆれぐ二三町ゆハ
おぐ過ぐとくゝといそぐしゆへば標吉慌忙れて半履ゆも穿あへぐ。
裳を裹て走去けるゆゝ程よ黒萩ハゆくと三四町ゆとて指月寺の
塞玄ぐあゆとへとて来るよ逢ひゝ。ひゝけ緩ぐ笑片向く聽て樹蔭よ

立會ひ昨日標吉が御寺へ參りしと云ふ帰院のすをぜざりしよ何の程やう帰さ申ひしよろづよ富く賑し紀國府の水が深らやうんさても若や紀あひよけも逗留の久しかりしハ彼処の後家達を蕩しつさぞ面白紀すのこなりけんあなめでたしと笑ふあがら背を磯と敲著れば塞玄い半脱る歯を見しくうち笑ひ國府ハ富ても賑ふくも彼色男ハ不施不捨ふ。縁ある紀女人ハ度しぐさしとく立うへてちん身が顔をうんまく浮しうやひしくどそれも是も黄金佛の利益おれば錫を振る勧化よ月を累て昨夕ハ暮く帰著せり長途の疲労ある紀よあら程どまづうやちん身よ考せんとて一周忌の回向がてら其方を投く走く折よる紀処ゆく逢ふ紀といへば黒萩四下をえうり是首の府彼首の縣を待撓紀勧化よ日を送らんより黄金佛の建立ハ捷径のすしを結れといひ

ふ。くの沿声を潜め彼骨相書をもて索らるる反逆人吉見義邦標吉よ舊縁ありとて四月の比よりひそを込れ縉紳のある果といハぬぢうふ人を使ふく檀那態面ハ憎れども標吉ハ佛ふ。庇を貸く母屋を取られ寄食人よるを搆く絶て頭を擡得ぜ賸吾俤よ恋慕してなりく袖を引くもう泳さし源氏の君の後弟でも業平朝臣の弟でも。ちん身を捨く仇しし紀弱冠を何ふ恵き度かさなるとバうふさよふ隋よ罵り懲して辱しあれどその後ハふも足も得出さうどこ寝首搔るとやとふ過せば背が足られて夜とてやもくハ睡られぜ。こが村ハ長もあく領主の館へハと遠う訴出んも女子の甲斐ふさ。標吉ハ甥あれども虚と大事ハ相譚まぜ。ふへば危く形ふく。ちん身が還りふ日を待びて待しとひあべてあしし夜のこが辟すを彼君よ

黒萩
塞玄
黒萩途よ
塞玄ふあへ
檜吉郎

あまり附ゐる目尻の涙をおさへく拭ひたり。塞玄ハて眼を睜りこれぞも
愚外の珎事之彼義邦ハ謀反の骨張組住が与黨なるよ平泉の柵かへ
入らぞ其許の宿所ま躱れ居るすれ身ま心残まべなるん。同類たとも許稟
さバ則その身の罪科を免して賞禄をあたふべしとあれバ。よしや一旦含蔵ても
彼奴を搦く献ふべ咎あるべき該ハなかれど年まうくとも撃術早技本吏ハ
いまぞ揣らまぞ毛を吹て疵を求めなバ後悔其処ま立がたし。由断さして
潜びより首取てあん身ま遮与さん。然とて時日ハ延さまぞ今宵なるべへ
翌の夜まといひかけ耳を引よせて。密語バうち頷き亡人の一周忌。
七日の殺生ハ好むべきすならねども。晡時が過れバ精進を落ても
憚なきなき墓秦をゆきて出るまあよより還るが疑れん。彼冠着が臥
房の案内今宵の暗号尚外まぬひ兎るすの鬆ふれども路辺あそん

それも便なし。あん身も庵寺へ共侶ま誘ゆんとて香染の法衣の袖をそと
引けバ引まそ出る小松原ぬくりねの日と戯れくち譚ひて伴ひたり。
是より先ま標吉ハ黒荻を追懸く走ること三四町過るまそまバまが養母ハ
道次ま立在て法師ま拗をゆゆりめして。軈て樹下ま立會ひ額を合して
密語形勢あるかねぐくおひしくバ間道を遶りく後方ま近つき身長ゆも
餘る尾花が袖ま躱れて。一五一十をゆぐつ。吉見冠着を殺さんと相譚ふ法師ハ。
塞玄之去歳より養母と情由あるす人の聚語の耳ま入もどもかるべしとハ
おひおやこれ只天魔の所行なるべし。譬バ冠着の性として五十ま近き人の
母ま事かろをうけゐれんや是ハ決してまが母の冠着ま調戯ならせしを。
懲させゆへバ。ふかく怨みて悪心を發せしなるん。されあるべしして彼君を害き
まゐすわるバ月ごろ心を盡せし甲斐なし。是併古主梓殿及父母の亡魂が

養母の珠数を遺れさせく吾骨を導れ給へ。さていかゞせん。とぞうみ
或ハ呆れ或ハうゝと頭を傾け又ハ頻に嗟嘆をうけ給へく標吉ハ
困じてかへる途にぐらさるかゝる思惟るに思意ありとも養母ことを顕さ
忍びがたしいもしく彼君を落さんものと深念して其処ありいもしく宿所か
還れば義邦うちくに遅うして途中に追着らるゝと聞きて標吉点頭のこ
又立戻りて諸所戸を内より楚と鎖して裳の塵埃うち拂ひ義邦のほうへ
参りて愀然として稟ける母ハ追着ぬるもしるべもなく途中に大変を
竊聞ひし君この処よりすゝ隠れとれど人よりれく彼此の悪概おぐ
今宵更闌潜び入て撃ちんと謀るこ速にその毒氣を避ぬべ危るべし。
ありれども日の没るまでいとれも稱ひいぶ某甲夜より外に出て郷導仕
らんこの駒形を山踰して玉造のくさへ落さるべそのとき某ハ尼沼川のあ

ゆく君を待ち受ん婦齒の松の邊まで送りつけ申ん是より賀美郡に至り山
又山ゆく里称こ案内をあくざるめハ究めく迷ハ難儀なれども必ず地理を
説とも蓋ゆく曩ハ母に領ひし沙金ども納戸の鍵ハ親あるうの。
腰に著て出られば月今ハ不便こそれも甲夜の程にこそ返し進らもべ
真立く密語ハ義邦ゆくうち驚き原来もうこ有りけるよかくまぐ
命運縮まれば逃とも脱れこかるべしこれバとて田夫野人のまよかくらんを
無念のうとふく運を天に任して其許の教に隨ふべし又黒萩に領け
沙金ハ月来寄宿の料にとおひく実ハ渠に与へ盤纏ハ腰に餘りあるバ
あるこのうハ懸念おせを今よりこ汝ぞ忠義落涙禁め難ゆ感謝に
堪ぬよろこばし只ぐ一身一命ハ汝に任せぐきこといもて標吉額をつく。
世ぞ世にてハしあるべ陪臣の子の某などぞ。ん目前へもゆくまんや。落

させゆふさ犯くまぐく後ひきまろべそれどもいうゆせん養母を捨て走らんハ不義と加捕某も安く宿所よ還らぶハ讐の追ふさう速あ〜んさゞれ寄窮の料をゞく宣ハまるハあろゆを老くハ吝あろものあまべ養母ゆもうくあろ始さ〜て後よ返〜まゝん志ろうとも此のすを今親ゆ告ゞこ〜ゆのびくよ起行のゆあろかゆへ肝要あ〜んと密やろよ相譚ゆ程よ秋の日あまべ短くて未のあゆをゆ過ろう今ハ母のろくり来ぬ〜ん氣色を曉られゆゆゆとひて立て諸折戸を開く外面うちなゆいゆぐくと柴小屋よ掛ろ草鞋引かろ〜此彼と擇ろて石よ推當打やろけて締を融〜ゞ程よ義邦も笠の紐の断離ろを結びとあく竹縁の下よ隠し置身のゆく後をゆあゆも又標吉ゞとろゆハ得ゞこ〜母ゆ秘ゆもいひつゆゆ黒萩謀る所ありて怨る氣色を顕さゞ飽まぞまれよ油断させゆ潜よ

聖人をうち相譚ひ。害せんとゆろあるべし。さゆを明く地よ告げてまれを救んとゆふ標吉ハ孝かして且忠あり。まれ足利よあり〜日ハ不憶并平ゞ。資よりて危窮を脱れ今又あまよ標吉ゞ忠義よ仇を避るといへども。彼ゆと始終を共よあゞこ〜皆薄命の致き所ろゆ歎くとも甲斐ゆあると。ちひろへ〜て出べ犯ろこをこゆく立ゆへバ標吉ハ打和げろ草鞋ゆ續松よ遂火縄をとり添ろく義邦の浦とうよりて来つ君ハ暮果て後よ厠へ登せゆ〜て背門のうさとろ出ぬへ某ハ先〜ちて尼沼川のあゞこよ俟ん。出後れゆふゆと謀あハせく草鞋と續松を遞与よゆん。義邦ハ遺ろてゆて。その誠心を歓びゞえてこれをも笠とろ共よ竹縁の下よ置標吉ハ地坑よ柴をさし燃くゆ膳の准備をろ程よゆ黄昏よろりよけり。浩処よ黒萩ハ遽しく帰り来つ折戸を推く進を入り莧の下よ裳を褰く足の塵埃を

洗ひ流せば後ひ来つる悪僧塞玄懐中より一口の戒刀を隠して襟巻を
りく面を包ミ樹牆の間より地坑の法とりて坐しゐる義邦をうかゞ程よ。
黒萩竊ゝ指し示し更ゝを抗頭を掉その意を示せば塞玄はいく
さびとなくうち点頭今来しうへ退却ぬ當下黒萩ハ水田を求食鷺の
如く隻脚替ゝ引揚て跡を拭ふ程ゝ標吉ハ門の戸を引あけとそ立出て。
あくで毋ハ還りゆひしうと呼ゝけられて黒萩ハをいと答て進ミ入り頃日の日の
短き花女の歩の甲斐なくて急ぐとはまで黄昏ゝうきて彼君ハいゝよ。
とゝ間ゝ義邦ハ掛燈盞ゝ火を点し途の疲労を問慰やゝ氣色あるべ
黒萩ハあゝ竊ゝ歓びて他支なきさまゝ挨拶もかくて夕膳ゝ果しゝ。
標吉ハ養母ゝいゆゆう一周忌の料供ゝそ里の甲乙ゝ物を受ぐゝいゆぐ
いゆゆく謝礼を述ぜ翌とゝど生活ゝ障あり甲夜の程ゝそゝうち

遠ゝ支中の左側ゆハ還る忌し。疲労ゝよく鎖して。ゆく睡りゆとゝ。
黒萩ゝく呂ゝ義邦を結果るゝ標吉ゝ宿所ゝありてハ熟睡るとも
影護し是のゝゝ心ゝ勇むを笑顔ゝあゝゝ。そハ一段のゝ三日佛夏ゝ
歓しゆと心ゆハ勇むを笑顔ゝあゝゝ。
拘ひて生活を闘るゝ翌ハ殊さゝ半日の間もゝと惜ゝ。秋の夜
長ゝ比るゝ心ゝどゝ相譚ゝ。ゝゆ天明ゝ還るとも。ゝん身の保養ゝ
ゝゝゝ吾倩ハ何とも云ねとゝく。ゝゝそゝゝ標吉ハ擔裏ゝ松とり
ゝゝゝど火ハ点さゝ熟ゝる里の中ゝゝ是ゝくゝ。ゝゝゝけゝハ九月
廿八日。ゝと暗ゝれバ更闌ゝく還る為ゝと肩ゝ掛さゝゝ吾倩ハ知ゝく来ん。
ゝく就寝ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝ義邦ゝ目を注ゝれバ冠若ゝさゝ
面色ゝ生ゝ立てゝ遣しゝ標吉ハ一町ゝゝ歩ゝく竊ゝ引ゝ樹牆の

蔭軒端あぐ。撿れどもそこらよ立潜びて家内を張ゆめ。然とても
おほ早かりとゆへば有繋去る。く背門は立又前門は立在外ゆ義邦を
守護ゆ。一時許遠寺の鐘声幽よ響くく既よ初更を告渉ぬバ。
今ハ冠者の出あゆよ程ハあ〳〵。とゆよあん猶彼此を窺ゆよ怪しとゆゆ
ゆもゆれば僅よ心をやすくしつ。尼沼のくへ赴妃り是より先よ
黒萩ハ標吉を出し遣く心かゆ。ゆへおゆれども。ゆゆ相譚しハ法師ゆく。
武藝ゆいと疎かり。又その齢も五十よあゆゆ撃漏もとゆとゆ。
所詮冠者よ酒を浮ひて醉臥さして寝首を掻せんこれよ計略の
亦あるべしゆと較計つ佛夏よりく里人ゆ贈ゆ。酒を煖うく有も些
塩梅しこれを義邦よ勧めくいあゆう曩よハゆゆ解ゆして殿の氣色を
蒙りゆ。勧解まゝんとゆひゆう。標吉ゆ宿所よをれば影護てゆうも

出ぞ面皮のいと厚き老女と思召れん恥しくを侍れ賤の男ゆ所為
とて闘諍せし果よ中直りとく盃を侍ることの侍かゆ。それゆハあ〳〵ゆど
過ゆ夜のゆきころよ帯ゆつぶハこの盃を挙させん。ゆへゆ温ハ今宵限りゆ
又更よ禁酒して身の慎を肝要よ心ゆあく仕ゆつ〳〵ん尚ら〳〵ゆく中
酒せども素より寛仁大度の君ゆ許させんと泣声よ只菅賠話て止ざり
けり。義邦これをうちゆく。この老狐又ゆゆとを魅るよあ〳〵ん出ぞ。標吉ゆひ
つゆゆ。此彼ゆひあいきれバ。ゆゆを毒殺せん為ゆさゆゆゆハ酔して同類よ擬さ
せん為ゆべし。これも又此奴を謀りて脱き去んと心ゆハゆひゆう。莞爾と笑ゆ
こハ改りしゆゆを。ゆけ月来ゆよ身を寓ゆう酔ゆ人を拳しと若輩の
短慮ゆり後悔膳を嗟と久しゆれとゆかくハ勧解もせゆ何ぞふ心よ含ゆゆ。
とゆひて盃とゆ挙く飲ゆりゆく席薦よ湯入らせそゆよ返しゆべ黒萩ハ

あるをあしらうと倉笑ひて盃をうち戴けば義邦はいでや酌をとらんとて。
溢るまでよ蔀あゝ黒萩はこの十日あまり酒をば絶く喫ざりしよ今
その香を聞その味を味へば舌も蕩るばかりおぼえて餓鬼の如くよ飲
盡しつ又義邦よ勧めけを義邦はふくも酒を嗜まれども既よ毒気を
試くければ只この老女よ醉せんとく軽く受て投あへば黒萩は我を忘れて。
盃の数かさなり眼中濁りて舌もまわらぬ義邦もいとう醉うる如く
膝を崩してとゞほうよ肘杖突て黒萩よあん身は何とかあんの曩の
うれ慎てその実情をあらぐれば心やもあらぬるぞをしてあん身よ腹を
立せうとうれ出いあぐ妻もあらば。あん身も亦嬪婦之齢は相應しらぬ
とも世よ絶くあたるべあゝど悔しけてをそけり。といはれく黒萩胸
うち騒ぎそは宣あゝ屋言あゝんといふを表ぐくえうへうそおでふあん身を欺く

べけ。あん身が吾侍を欺くのゝかくあで醉くは堪ぬこし罷くもとう睡
らんといひけて身を起をを黒萩瞻く推禁めいはんとれば又さゝゝ。
塞玄よ約束あり初よりこの君の如う宣ぐいうでうれ何を恨まよ人を
相譚ひ害せんとあぐく謀るべけ。うとそをそは告らまで告ぜは今霄彼
人が潜び入く郎を殺さんゆひ切く密夏を白し共侶よ走らん欺いやく
密夏ぜこ告あうくべ愛も想も殫果く吾侍を伴ひあるべうてき
身をあてけ。と悔の八十ゝび百千遍尋思よ暇あぐれば掌合して拜む
のゝ胸ゝ伝はいとぐあく醉も巡りて泣沈む義邦是をいえうくそ避て
臥房よ赴けうと且して黒萩は頭を擡ゆうえうく悲や郎か捨られう。
一緒の陳奏と独酌よ復五六碗乱飲盃を投捨く隻膝立て沈吟じ
再三ゝび考ても偶靡く男郎花彼遍照よ折せてはは今をそ〻あの花もかし。

過失を賠詰密議を告く今宵郎と共に走らん然ハとそ膝ゝを掛く立あがれとも跟く蹌く蹌妃ぐゝ義邦の枕方に近つく程よりと割々もバ搖被る茶つ義邦立く傍に在り引つけく遣過し背を磯と衝しゝバ黒萩ハ撞と音して蒲團の上に倒るゝ醉ゝるゝの癖ゝれバ一ゝ例れく遂に的起ぢ瞬るゞ如く死るゞ如く鼻息のそ高かりける義邦ハその醉を久しく有せん為に黒萩ゞ頭より衣ふくゝゝ被せ臥蓐の下に隠しゝる脚半の紐を結びあへぢ刀を取て腰に帯落やゝ戸を推開く竹縁に尻をかけ草鞋を穿燧袋を腰に著笠をふかゝし松明を携く黒白も別ぬ暗妃夜に標吉ゞ論ゝる路ハ其処とも知らぬ尼沼を投く出へバ夜ハ亥の時なりにゝる程に塞玄ハ寝室の鐘を途へて突つ時分ハと標吉ゞ軒端近く潜りて内の模様を張る

寂寞として人定り南面の竹縁あり雨戸を細く開くあり。この小房ハ義邦の臥蓐へと豫て予り去歳まで度く来る家の案内ハよく知るゝあり入るとて黒萩ゞ戸鎖を外しゝるゝん首尾好ことあるに点頭且縁頼に腰を掛く伸上り又耳を側く内ゝ熟睡せしを知けん身を横ゝして閃妃入り水戸戒刀を引抜側めく搜搜く雲時寝息を窺ひつゝ是ありけりと呟く決めく左に被る衣を拊胸のあるへ跳蒐く藁藉も徹とゞさと刺せ刺せく忽叫苦とゞりに魂滅る声を立させゞ呼ゝ隨に刺留く魘く首をゞ搔こりける。當下塞玄ゝあゝ響に黒萩ゞ標吉をバ甲夜の間に謀りて宿所に在せゞといひよれどもを立かへりて厨のほとりに臥ゝる欺這奴ゞ覚くハ如ゝんとありしバ更に黒萩に為ゝるに及ぜして血刀を拭ひ納め首級の頭髻引提て鳥夜に

紛れて走去りかねし程より標吉は尼沼川のあなたより立て吉見冠者を
俟程より半時あまりを過せども義邦いまだ出も来ぬゆく先とうぬ暗夜
なれば山路より迷ひ出べき欲り出後れて悪僧の毒刃にあひぬべき斯と
ちゝび何時までも門辺より立て俟べきうしより養母が聴るとりわけとちひ
過しのぜんしまよりて冠者を苦しうもとめうけとく心もとなくとうごちて
遽しく燈をとり出て携来つる松明より火を移しおのが家路より引かへせ
途すがら油断せで冠者は後欲先欲とそ前後左右より眼を配りて来るに
ちゝびとが家近百歩より足らぬ小阪道九折なる樹下を遠り出さる行合より塞玄
磯と逢ぬ標吉はあり照せ松の光より佶と見て面を包みし癖者が引提し首は
養母と吐嗟とぞうり驚怒とおのれ癖者親の讐其処を退とと呼留れば塞玄も
亦光の光より取る首をちで免れくとそ錯誤をうと滕騰如引提し首を

うち捨て逃んとすれば標吉は奮然として松明投掛刀を晃と打振て
背を一刀丁と砕る砕られて落る頬被脱ぐとくやひろ塞玄も戒刀引
抜如一声嘶るを切つるを受ぐ打靡し怯む処を蹴倒して起んとするを
一撃より首打落しく息を吻如又松明を引照らく仇人をうれば塞玄
ありこの悪僧は吉見殿を害せんと謀りしかれは正しく竊せるよいろ
のちびとが母を殺しく走り去らんとおもうん裏面のもうをもうんでやとく
聽く宿所よかへりて先義邦の臥房をうるよ養母の死骸ありこと
ありて松明を接滅しく納戸の行燈引提く家の四隅隈なく撿ふ
外へ絶く死骸もなく爐辺より盃盤狼藉しう原来冠者は恙なく
落ゆひしより疑ひし自業自得といひぐうとう母は何の故より臥房を
かへりく冠者より代り塞玄より撃れあひしゆうん。ありのより母は吉見殿を。

明處有王法
暗裡有鬼神

標吉

惡玄

色中餓鬼
人間夜叉

惡僧惡玄

醉臥せんとて酒を勸めみづから酔く彼君の臥房に迷ひ入らんを塞玄ハ
あらぬ事して冠者ありと云ひとうるゞ母を害せし欲母の不幸ハ酒の咎
恩を悖り義を背き吉見殿を害せんと謀りし邪慳ハ因果覿面天の
責ありぬべくかく故主を救ふても親をば人に殺されぬ吾倅ハ何とある
べきさてもあはれ哀しやと養母の首を抱き潸然としてうち
歎く涙に問ハるゝけなを且しく心を鎮め吉見殿ハ悉く落ぬ
否を云ふ是も亦死なんとすれども既に親を人に害され又仇を
撃られぬ迹を慕ひ當処の村長に誰をよんで訴へ出
當郡の領主莊司殿ハ理非明断ましく慈悲ふかと風聲に豫てより
夜ハいと長妃比ぬに今より領主の館に參らば曉ぐに必到らん
仇討のゆ免許をゆるく罪せらるゝとなくハ後に冠者の往方を索ん

吁ぬるとひとりごちく舊の岐路へ走り行後の證拠と塞玄が戒刀を
拿鞘を拾ひく首と共に携来つ母の頭顱に添く一袱に楚と負ひ
又松明に火を移して門戸を外より鎖固め星の光をうち仰げば夜ハ尚
亥中田舎道山田の畔に秋蛙鳴声高館の邊ぬる領主の館へと出去ぬ

中輯第廿六

山神洞に夜雨
信夫館の隱蓑

さて程に義邦ハ黑白も別ぬ烏夜ぬ夜ぬ迷ひ出ぬ影護さに
松を燭さて山路ふくぬ迷ひ其処ぬ欲と踏分く行ども
標吉が教し川の上に出て峯に登り山を下りおゞ処を彼此とうち
遠るぬ程に身ハいとく疲労しぬ火を鑽く
松にうつしぬ照らして進む程に夜ハ丑三の比なるべし深ゆく秋の天定め

ゐく雨さへ俄頃ゑ降そぐ心も共ゑ松明の光もまゝゑ滅んとをかくるゝハいよく進ミぐさしと勝て樹蔭を索るゑこの処巖ハ高く松瘦て拈ゐんと浮茅萱の下ゑいと絶くゐる虫の声を在斯ゐくての山間ゑ廣やゐゐる洞ありて左右の岩ゑいとぬりゐ注連懸りゐ義邦ことをえゐくりて頑ゑゑこの洞の中ゑ山の神の禿倉ゐ〳〵ゐくゑ雨を避んとゐく進ミ入らんとゐるゑ松明の火ハ滅果ゐそのゑ裏面ゑゐ声をゐけく来ゐるを誰そと問ふゐのゐ義邦ゐれゑ驚と〳〵く原来この石室ハ山賊の巣ありゐゐ運の窮と覚期して分ゐくゐゐもゐ驚ぐぞ刀の鞘ゑゐを掛ゐく両三歩進ミ入りゐれハ是行客ゐ。ゐゐ何のぞと問ゐへゐれく又裏面ゑゐれも亦行客ゐ。おも〳〵ぞ山路ゑ迷入りてこの処ゑて日ハ暮ゐ既ゑ今宵を闇夜ゐゐ麓ゑ下りぐゐを揃りく天の明るを俟とゐ義邦些かちゐゐれども猶欺詐ることゐゐ。一点も油断せぬゐゐゐゐれども。猛獣蛇蝎の患ゐんゑ。ゐゐて火を燎ぐゐゐと詰問へば寝ゑ然ゐいゐん。今朝山河を渉ぜゐゐゐ燧袋を遺せゐゐ術ゐと答ゐ義邦ゐてゐん。ゐれゑ燧も松もゐ雨ゑ撲れく滅ゐるのミいやくとゐひゐけく燧せとゐ。ゐく火を打ゑゐ湿やゐれば早ゐつゐぶとゐくして焼さゐゐ松明ゑ移ゐて是を左ゑゐ照らし右ゑゐの力の鞘を握りく洞の中へ進ミ入りゐゐその人のほゐゐ立く送ゑ面を對れが彼人ゐゐく声をゐけ和君ハ冠者ゑをハさぬゐと問ゐく義邦晴を定めゐんとゐこの行客ハ江三二廣光ゐゐ。ゐゐゐゐゐふとぐゐゐゑ歓びゐゐゐ主従ハ涙ぞ頻ゑゐく流ゐ當下三二廣光ハ遽〳〵く居替りく主君を上坐ゑ居まゐゐ。ゐひゐけゐゐ処ゐて見参ゑ入りゐへバ孰を先へゐゐんゐ胃のを踊ゐくゐゐく舞ゐゐこと

尼公が如し併廣光が月来の念願空しくして悉く尼尊顔を拝しまつる歡びハ言葉ハ述も竭しがたしとも君ハ彼夜うち弁平をねぎ出べ出せ乳母ハ山中ハ迷せ給ひ[illegible]ひく後盾やと憑こしよりうち見たてまつりし。當国へハ昨けハ立入らせ給ひし欽又外ハ[illegible]ん隠宅を求めさせ給ひしが廣光が身ハ摘く推量りまつる難苦もさることといひけくさしうむ涙ハ目を閉まべ。義邦も鼻うちかむ現命ハり時ハりて圖ざりうる再會の歡びハこれも亦夢かとぞかりうふかしこの春三月三日の夜故郷を逃去りしとて尼その曉ごろハ上毛なる勝澤の松原ハく間ハく追兵ハ迫留らまるれハ後陣を禦んとて弁平と立別ま間遠ハなりしうハ遂ハ渠が存亡を考ふ後れく来つるものと尼ハ直ハ加賀ハ赴尼朝夷ハあんとて佐味が宿所ハいまだく向ハ出内ハ去歳の春より鎌倉ハ在りとハこの故ハ義秀が往方も絶く考ハみく。

進退其処ハ究りて且く小松ハ迫留まるれど汝も亦来るなきぞり朝夷ハ陸奥へ赴尼ろうハあくざるとてうぞうをあらがゆく川尻湊ハ赴尼て。商船ハ便して四月のちであこの陸奥なる尾崎の浦ハ船をまをれ海陸の疲労大くまうぞ且く旅宿ハ枝を留く更ハ高舘を歴覽し頻ハ進て玉造なる判官殿の墓をうぞかへさハ駒形の山寺ゆく梓治部丞有友が花黨馬場標太が一子なる標吉郎とハうめハ避逗し渠が家ハ身を寓せうふまぞて世を潜ひしハ又一朝ハ禍起りて其処なる足を駐ること始めうぞ。標吉が教ろう尼沼のうさへとく脱れ去られどもいと暗くまハ山路ハ迷ひくさしてゆく川辺ハ到らぞ。ハうぞあへるの雨が主従ハ媒介して。処もあるんハこの洞ゆく汝ハ逢しハ寝ハ寄こハ氏神の冥助なる欽又先考の導尼なる欽勝澤の危難なハ雨ハまく温子を喪ひ今宵ハ

又雨はあつく石ひろけあく三二は逢ひぬ禍福は猶糾る纏の如しと
古人はいへり吉凶倚伏は測るべからぬ浅良井小三二は恙なく汝は
當國は潜居ると知らく来つる狩井平内は逢ざりし狩渠が生死はあら
ざるやと過来しことを告あくぬ侶を忘ぬ誠心は廣光感伏し
或は歓び或は憂ひて石ぬ太息を吻妃天飛鳥の鶏の啄大うとなるぬ
翹語へば風雲環會は難う其痛はを負ぬしく速は小松は到らば
彼処はあくあひきうんは悔し妃は只病著こその故は簡様くと八鳴室平
ホを防妃留うと妃必死を朝夷は救れしうは是より先は義秀は藁二郎は
相譚く浅良井小三二を越中婦員の岩神の稲向判五許遣せり
又義秀は去歳の秋稲向は宿かりく悪人一三は再會し已とを妃ぬ
判五が女兒友鶴を娶りしうは又義秀は今茲の春下總へ赴妃く更は

下野は来まうは夕赤貝の里を過りく浅良井は對面し冠者の危窮をあり
は又廣光は義秀と相伴ひその日大石の山越して上野は出信濃路はぬく
来つると妃廣光が金瘡腫痛く中途は日を経ぬしは小松の旅宿はひのし
と妃追捕の沙汰嚴重なれば義秀は扶掖れてかくく旅宿を出ぬれども
進退窮りて患ありさは自殺せんとしつると妃義秀は禁やられ又彼一三豪二郎
ホが冠者と朝夷を迎とうんとて行轎を早し来つるは環會衆人は諌られく
心あしぬは岩神へ伴ひ義秀は冠者と井平を索んとく躯て其処より
立別ひ信濃近江をあらぬしく赴くはをその夜さり一三は宅くるまでを
巨細は物がたりし又いはく某は父子夫婦ひかけく猶向が扶助は
よりて露命を繋妃横判五はまがるは良薬を求しうは必死の金瘡
七月は至りく大うさあしぬ平愈せりいぬ冠者の丸在所を索まうんと

ゐひ決めくまづ方位を占せゝ全くこの陸奥ゝ當まりようて稲向ホゝ
辞し別れ商旅ゝ打扮つて直ゝ進ゝて當國の封疆ゝ入りしハ八月のすえ。
越後路より来ゝられバまづ河沼辺より耶麻會津大沼の四の郡を徧歴し。
安達の原ゝ安積の沼信夫郡伊達ゝ刈田柴田名取の片瀬川宮城野の
萩末枯くハ岩ゝの躑躅も春ゝ似ぜ奥へくと色深紅葉を幣ゝ是
首の神彼首の社へ頭言ハゞ君ゝあハせ玉造賀美栗原の山里ゝ日数
ふりぬく露去られ露け紀途も長月のすゑハいろゐる吉日ゆく君恙ゐ紀
見参の本意を遂しハ五十四郡の主ゝあるより福ひありゝ有ぐくしと
歓びの天地ゝ満る意氣揚ゝ忠信ゝ顕れゝ義邦熟らもゝ。
原来朝夷約を違へぜこの春吾偏を訪ひるゝ只ゝ危窮のとゐゝ
ゝく對面をぬざりしゝ遺憾紀限りゐれども既ゝ廣光一家を救れゝ
勇の蔭ゝ寓しハゐひろけゐ紀恩恵ゝ彼人ハ加賀ゝ鄰る越中婦負ゝ
ありとゝく孫ハ皆小松へと走りしハ今更ゝ是非ゐ紀ゝ歎ゝるを亦ゐれ
故ゝ彼人ハ難を犯し危紀を忘るゝ果ゐ紀逆旅ゝあるせんハ心苦し紀
ゐゝあん又藁二郎も信あり義ありゝ。渠ハ寔ゝ
向上りゝて駒形村ゝあり一日のすゝめをいへバ如此くゝ終ハ簡様
箇様ゝとく標吉ゐ忠孝黒萩ゐ嬉滋彼とゐく此と紀く一五一十を告ゐバ。
廣光頭ゝ驚嘆しかれバ標吉郎とゐゝん亦沼ぐゐ紀の義士ゝをひへ。
君ゐく所ゝ祐あり御閑運もちゐ紀ゝ天も明バゐん供しくまづ
越中ゝ退くべし稲向判五ハ冨といへどもその志客かゝ客を愛しく義
あり信あり朝夷逆旅ゝありといゐとも終ゐハ勇の家ゝかへん究竟のゐん
隠宅岩神ゝおゐりのゐとゐ管ゝ勧めしゝ義邦この議ゝ從ひて天の明るを

待程よ雨ハ愈〻歌よろ。かくて義邦ハ炬火を續くえさせく廣光と共伴よこの洞の奥をかるよ入ると一反あり四方く奥ハ広ほ廣やうあり。その中程ハ石ハて造れる禾倉ありそう扉ハ失せく神体あり。あよ住るるあくあり。欲焼捨る曲突あり床ハ也ハ巨石あり山賊などの住所趾ハ。又熊を撃獲夫などの寵猟せ所欲と主従さ多くよ評して。舊の処よかへりもれば。その間よろ天ハ明るく山鳥の声をあり。ほ〻ハ人と主従ハ草鞋の紐結びかえなどする程よ忽地洞の外面よ駿し犯人声あく。柴よ火を被投入れく焼殺せとぞ罵りる主従さくうち驚犯人やよ早ま。ハ吾們ハ行客と昨夜の雨をあよ避るく天の明るを俟るこ殺さるべ犯ものよあ〻ぞ。疎忽の挙動後悔あんと諸声高く呼禁れば。大将とおぼ〻きもの洞門よ立跨ま愚あり山賊ハ経任ぶ逆乱を甘んじて。

汝ハ近屬この山の神の洞よ穴居し昼ハ伏〻夜ハ顕れ行客を剥里人を劫もより民の訟置くこうろよ。

あつると犯汝ハ逃亡られば且く兵を向られぞ徒よ月を送りて再び久を来ることを揚り不意よ裝く推寄こうかくこふハ領主の御内よるものあり。

あ〻れこう水草十郎昌甫ありどもく索を被れとぞ呼りける洞の中ハ主従ハこれを考くおもく驚犯いこう所さもあ〻ん。あ〻れども吾們ハ山賊あ〻ぞ野伏よあ〻ぞ疑〻くい勢を俟く對面考ん。と叫ぶよ昌甫嘲よ冷笑ひあ〻べ駿兵を退んとく〻。

後よ跟犯洞より進こ望る処を左右よ待こる兵ハ足を拂く廣光と義邦を打倒し矢庭よ索を被こうるそのとき犯廣光大犯よ怒く蓬犯人こ犯挙動ク〻吾們ハ只両人こ何ぞ再三の問答ハ及ばぞ理不盡よ捕ハ。

その賊なると賊あるべくもあらず顔色言語よりとも考べし疎忽之と敦圓ハ昌甫
呵々とうち笑ひ是ぞ不敵の癖者ハ形を変名を偽り出役をうかゝ
ぞよ賊あるべしといへどそ行客ありといへどそ輒く放ち遣べきや汝ホい
何国より何処へ赴く行客ありぞ姓名いかゝと問詰られく廣光答ハ
迷惑し実を告んハ憚あり沈吟ものべば昌甫ハ眼を瞪らし声を厳り立
此奴ホその出処をいはぬ姓名を名告らぬハ山賊よ疑ひあり裏面あほ
同類あらん搜せくと下知もれば早雄の騎兵十餘人戟を引提半弓ハ
矢を刻ひ左右ハ松明振照らせく洞の中ハ進を入り戟をりて敵立奥
まで限なく獵求ぶども二人ゞ外ハ物もなくれば食徒ハ退処ぬ義邦ハ
ちゞめり微運を覩て頭を低遂ハ再びもいはぬ廣光られをうゝ
て主君の心中推量ぶ胸ハ碎けく腸も断離るぞり歎せり。

かくて水草昌甫ハ義邦廣光を引立て速舎高妙とさゝめくく。
高館を望く還りぬ抑本郡磐井の領主ハ故鎮守府将軍藤原
秀衡が一族なり佐藤荘司元晴ぞ同國信夫郡ハ在りしぶ
信夫荘司と唱ふ便是九郎判官義経の忠臣嗣信忠信が父なりき。
かくく秀衡ゞ嫡子被察使泰衡その庶兄國衡ホ父の遺訓ハ悖て
九郎判官義経を害せんと謀りし比元晴ハ泰衡ゞ弟泉二郎忠衡と共ハ
争ひ諫ぶども聴れぞ泰衡竟ハ忠衡を殺し義経を襲て衣河の
城ハ自殺ぶ鎌倉殿ハ憑られども頼朝られを不義とそみて泰衡
國衡を征伐し合戦絶ず日わく陸奥出羽二國平ぬ実ハ文治五年
秋九月なり泰衡その性殘忍なれども元晴ハ恩を思ひ義ハ仗く
ぶ反ぶ石那坂の砦を守て大軍を防戦ぶといへども大厦ぬ

顛倒せんとすれども。よく一木の柱べきよわんぞ。元晴弓折れ矢種尽て。その身ハ遂に生捕られる。泰衡國衡滅亡の後頼朝卿ハ元晴を赦しくその本國へ還し遣し。剃磐井半郡玉造半郡を宛行ハる。是その義烈を感じてなり。元晴則高舘の城迹に程近き圓山に屋舗を構へ生残られる家隷を招き。討死せしあれ子孫を扶持して。善政を施し民に東作を勧めといへども。近属大河太郎兼任が一子修羅五郎經任厨川に起り平泉を略して。鄰郡を攻動し。乱妨狼藉大方ならず。民農業を安くせず。離散するの多かりけるを。元晴ハ防禦の軍配間断なく。主從郡民力を勠しくよく境を守りしかば。經任ハ間近き平泉をあなどり。磐井玉造を犯し。ゆゑ窺ひ隙を窺ひ。程に信夫荘司元晴いいぬる比より玉造の山中に草賊隠れ住むと聞く。豫て計

畧を施らし。家隷水草十郎昌甫を大将として兵三十人を指遣し。彼山賊を搦捕せんとしれども。賊ハ兼てこれを知り逃失て。再びかへらず。昌甫候認て。義邦廣光を搦捕り信夫の舘へ帰陣し。聡く件の主從を廣庭に引居せ。書院のうしろに土主輪ゐて。未の刻音信なり。且しく佐藤信夫荘司元晴紋紗の大袖に綯の朽葉色の小袖を被て。山施子染の下襲金襴の袴を穿。朱鞘の短刀を跨ぎ。鞘ある大刀を引提て。屏風の背より遠り出端近う布儲らる。椅の上より登れば。水草十郎止と敬て。賞の駿兵と共に頭首を挙て。元晴を見る。吉見主從ハ頭を挙て。元晴を見る。年の齢ハ七十有餘なるべし。頭ハ士峯の雪より白く。肩ハ楊柳の絮に似て。星眼人を射て威あれども。顔色温和にして。猛くして長者の風あり。胡地の人とぞ在此荘司元晴ハ義邦廣光をつらくんで。

曲彔を前に引直し。汝等は是経任が支党歟又亡命の小賊歟その名を何と呼ぞ。いつの比より玉造なる洞の中に隠住むや。疾いへ。ずんと曲彔に擡遣佶と疾視ば廣光驚く氣色なく。領主の業験甚錯へり。某等は山賊なれば又経任が与類にあらず。加賀國小松より所要ありて。来つるもの也。某が名は五三介。一人は同郷の伴侶冠太郎と喚るもの也。山路に迷ひ山路に暮て。雨を彼洞に避るのみ。洞をもて隠宅とするものならねばなど陳ずれば頭をうち掉り。いな〳〵それは偽るならん。今汝が語音をきくに北國のものに似ず。明く地に実を告よ首状せずや。いかにぞやと詰問を一世の浮沈義邦吐嗟と跪きしん疑ひそのよしあり。吾們加賀より来つるといへども生國は下總なり。結城は故郷なりといひ暗を示す微笑現さもあらんさもあらんその男子怜悧げなり。されば汝等が撲様をみるに一人は武士一人は商人とみえたり。

是を伴侶といふと相應ならず。しかれども言語應答山賊に似ず又當國の人とみえねば経任が与党にあらじかしさるを経任が同類とせられつる。讒者の誣罔なるべけれども亦その中に情由あらんさればなりやと試問ば。義邦も廣光も忽に胸うち騒ぎ。さては早知りそ歟と思ひつゝ目と目を注しあひ文いふものもなかりけり。元晴はその氣色をうちながめて。うち点頭つゝあなと扇をもて招き。水草昌甫を招よせられなば。前なる汝們が縛を釋放し索取等を退せよとしいそがせば昌甫はあなりぬ。などといひながらも肯を傳へてその縛を釋せつ。義邦廣光は又さらに悪夢の覚る心地しつ荘司が胸臆を揣かねて。いまだ心ゆるさずなかりけり。元晴は郷兵ら。と先にて等が解捨たる索を執て皆退出なるを。又昌甫を招きつゝ扇を口にあてゝ當て密語ば昌甫は身を突耳をさしよせて。あなり果て縁頬まで左へ遶りて

元晴
恵智
吉見
主殿
知る
信実卿元晴
永草十郎さだ
ゆ〜八郎

笹姫の
第四の巻より出ッ
あゝ〜えゝべ〜〜
くさぶえひめ
廣光

退出して元晴かく相計らひ立ちく義邦を招のぞみ賓席にすゑ。
又廣光を招よせくそいふ葱蘭ハ褒といへどもその香外に洩れ荊蕀
藏といへとも其の氣更に顕る某ハ眼翳に耳聾に記稀古の翁にあれ
どもおほやけ所あり見る所あり聞く和君主従を知り給ふ。
吉見殿相従へるハ江三二廣光よりあらざるや。といハるゝ主従驚嘆し。
今ハ隠さるゝ廣光と君の答いかゝと問ハ義邦臆ふ氣色
あく現凄し紀眼力の明察せられく慚愧に堪ぬ只訝し紀ハ信夫ぬし。
某を義邦と知るゝ傳を放せいと問せもあれば疑惑ハ有理元晴邊塞の
武夫なれども罪なき人を搦捕く恩賞を求んや。あらざる又いふ所くその罪
なきを知るべし一朝の夢にあらず某ぞ来地ハ平泉の柵に近ふ敵あり
間諜を入れらるゝとも其ぞ故にこれも亦密くに人をもて片山里あぐく

穿鑿せ〻に駒形の里人田丸標吉が宿所にそ他國の弱冠寓居をられ。
その模様ハ如此くと告るを聞くよいぬる比より骨相書をもて索らるゝ吉見
冠者によく似ふるほ巨細にあらんなるに竊に標吉が本貫故郷を問ぬれば。
あるものありて告るやう原ハ鎌倉の長谷に蒲殿の老臣なり梓治部丞
有友が家頼馬頼標太と呼れしもの一子なく叔母夫田丸郡内に養れ
ふといへり爰にいかくその弱冠ハ吉見殿なるよし分明なれども又倩案
ふるに彼人真に經任が一味与類なんぬ逃るく當國へ来ふるに平泉の
柵内入らぐ何ぞ標吉が家に寓ぬや加藤修羅五郎間諜者を入
とも不知案内の他國人吉邦をもてそられに充んや彼此をもて案ふるに。
吉見殿ハ宛狂に身をあらふるものとそのとなるも推知せり。
この故にそれハ只あれども知らぬもりもしてかくハ僉議に及ばぜ在此

近属玉造あり云云の洞中より山賊ありと宣へば腹心の老黨水草十郎
昌甫より兵数率ひさせ昨夜中よりも立して搦捕らせく且窺るゆ
両人共に相鞆言語山賊より類せば折しよく彼標吉へ養母黒萩を恵僧
塞玄に撃れ當坐に母の仇を殺して今朝しもまに詐来ついまゝ逆らゞ
あるべくば竊に標吉を閑室に召入れく吉見殿のうを問ふに渠再三
陳ぜれども證据分明あれば脱るゝに辞ぬく云云の故をもく昨夕
冠者を山越に延しくこゝへとゆう屆く実を吐しべ迚標吉に和殿
ホを透見させ冠者に相違ありやと問へば是さへ脱さ所ぬくて落涙
数行に及びしが相從へる一人に某いぶ知らぬといへも骨相書をそ
案ぬるに必廣光ぬん冠者を慕ゆくこの地に来ぬ昨夜ぬくば
山中ゆく再會せに疑ありとゆひに和君達の縛を釋放させぬ

肺肝を告ることゆ宛枉を憐めべ元晴元来秀衡が一族ゆて鎌倉殿の
譜第に向ふ判官殿ゆ恩義あり子共両人（嗣信・忠信）を判官殿に
進らせぬ兄又蒲殿ゆ義経ゆの舎兄なれども吾儕なれば怨もなく恩も
かく義もあるべ冠者ゆ彼昌甫が頻りに和君主從を
搦来つ面をそしより更に愛憐の心あり叔姪の骨肉ゆ現有繫
ゆく冠者の面影判官殿に似ゆ為に謀るに由ゆしいでこの薄命の公子を舎蔵よ
ゆくかくの如しゆ只ゆまでもこが館に潜びて時を俟べ身を保ゆ
あべの後盾ゆそうべしとその赤心を告べ義邦ゆもさべ廣光ゆ
雀躍しく天に歓び地に喜び席を避く拝謝の迭代に月来の艱難
苦労を物がり時夏が隠慝詮言又義秀并平標吉ゆが義あり信

ある癖の趣あらもなく告しらべ元晴感嘆浅からぬ為よ貌を改めけり。
且して元晴ハ掌を打鳴らせバ豫くあらかじめを知りて水草十郎昌甫ハ
田丸標吉を招く縁類のほとりよ来つ標吉ハ義邦の恙なきを見て大に
歓び恩ハ膝小膝を進めしらべ元晴これをえらへて標吉郎汝當坐や
養母の讐塞玄を殺しくりこの賓客の口状と符合せりあるそを答へし。
ゆくよ汝ハこの賓客よ舊縁あるものゆへ召くて對面を許せそその旨をこそ
始よと諭せを必く義邦ハ坐を立く廣光もろ共標吉が保とりよ来つ疇昔
物かし後のくり信夫荘司が蔭よ寓る縁由を密語バ標吉も亦黒萩が枉
死のくりを告よろう義邦ゆく嘆息しその仇討の速成を誓く廣光よ
引あハ沼ゆバ廣光ハ標吉が月来主君を介抱の歓びを述るよあん標吉も
亦廣光が主君を慕ふ忠心の空しくぐるを稱く已ぞ彼此會語ゆう

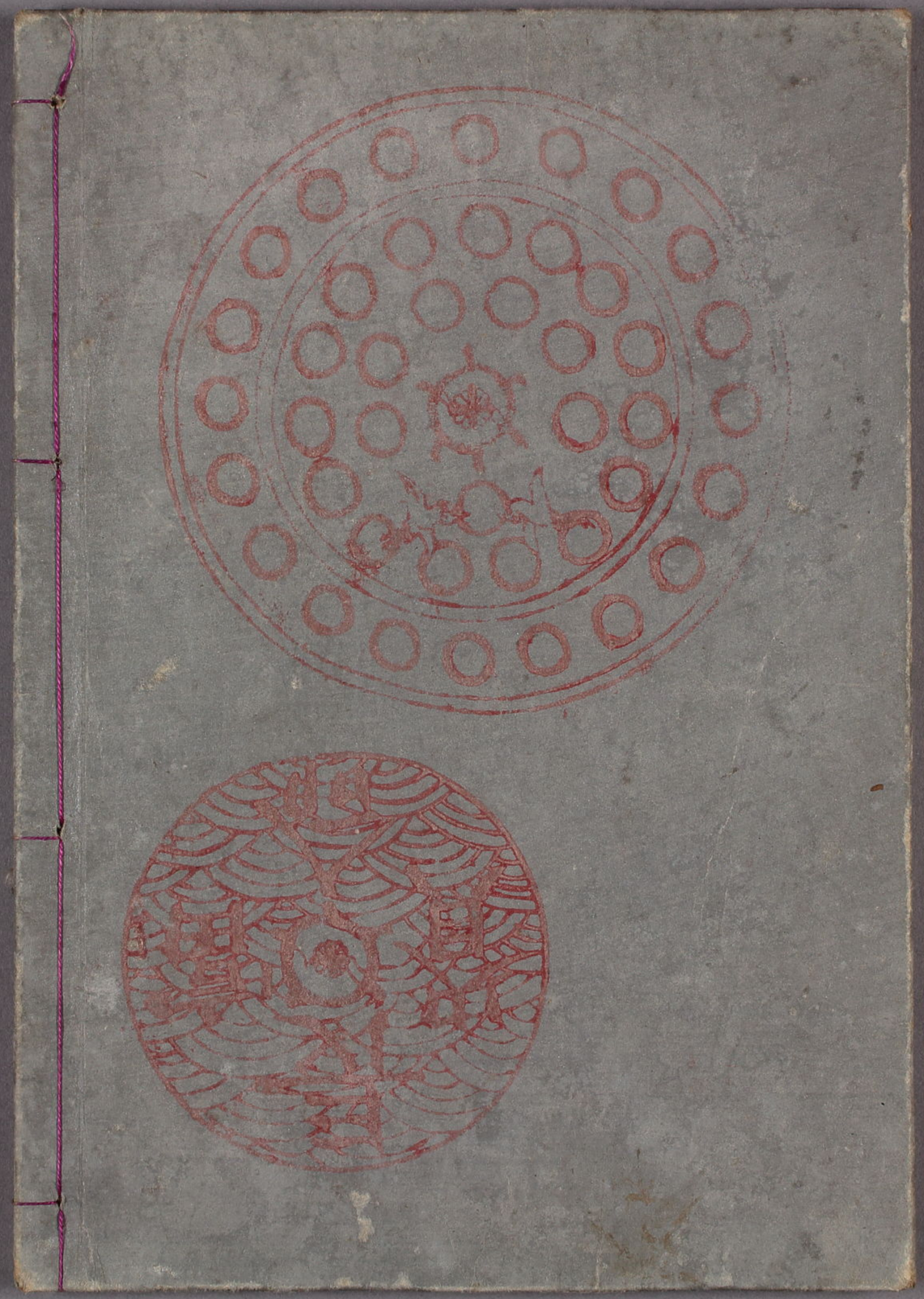
やくよ果しらバ義邦ハ舊の坐よかへりく主人よ挨拶を元晴ハ莞やうふ。
昌甫を召近つけ汝が麁忽ハあらくよこの人くよ徳あるこそれバあるどの
翁が代りく當坐の牽出物せんとく刀を取て与へしらバ昌甫羞く且
歓びこハ全く懲の功名ゆをひへとうち戴く腰よ帯れバ義邦廣光
共侶よ吾們が捕られし禍ハ現塞翁が馬しらりとうち笑く昌甫を
労へバ旨甫も改めく無二の志を示しもり沈の日既よ傾けバ元晴ハ又
昌甫ようち對ひ標吉ハ駿兵ホよ送らせく駒形村へ赴しく遣し彼
塞玄が亡骸ハ形の如くよ計ふべし標吉が忠孝いへバさらく汝ハ心が腹心
ありバかくハ機密をきくせもせれこの賓客の一件ハ努漏せべらくと
叮嚀よ説示せバ昌甫ハ謹く肯を標吉よ傳ふバ標吉ハ恩を謝し
義邦廣光よ別を告昌甫が後よ跟ぬく聽く退ぬ知らくバ元晴ハ

席を改めて義邦主従より酒食を勧め是より常の閑室に扶持して深く潜せ近く使る、男女もその心を悟さるる食腹心のまれあるべ絶えて他へ漏さるべかりくく又元晴ハ標吉が忠孝の大くさをあらはを感賞し渠が養母の忌ごと果てバ速やかに村長より他村の民をもろち移しく渠が下よりそれとそ愛するあるろ深かりけり。

朝夷巡嶋記全傳第三編巻之三終

永岸　思之中村貞慕述
同　博愛奥田頼聞正

頭書類語 小學作文教授書　全五冊

此書ハ先生曾テ学校巡回ノ際各校生徒ノ進歩惟リ作文ノミ諸科ニ後ルヽヲ憂ヘ其教授ノ順序ト方法トヲ講究シ其発明スル所ヲ実地ニ試ミ其效アル俗文要語活用問答令正誤文俗文復訳凡ソ各若干ヲ初巻ノ首ニ掲ゲ次ニ作文教方ヲ説キ日用短簡文一百餘章ヲ編ス○次巻ハ首ニ俗語鞆キ頭イテ(ヲ)掲ゲ次ニ四季贈答文祝賀悔吊文電信文公用(願届)文諸証文等ヲ編ス○第三巻首ニ作文要字(虚字)和解ヲ掲ゲ次ニ分合淵行ノ雅文ニ俗語ヲ対ス(仮名字内外ヲ以テ一文ヲ成ス)毛テ知キ未曾有ノ極致ニ八績百餘章ヲ編ス○第四第五ノ両巻ハ首ニ漢文字助字虚字ノ例ニ用ル例繁精及ビ誤ヲ弾ヲ示シ次ニ記紀事論説賛銘題跋傳序祝文吊文祭文等ノ作例数百ヲ編シ其文ノ種類ニ従テ其趣意ト作方ヲ説キ他人ノ文ヲ評スル語数十ヲ掲グ○但シ毎巻ニ作例及ビ類語ニ假名ヲ以テ訓解ヲ施シ教授且ツ独学ニ便スル書ナリ其親切ナル筆紙ニ盡シ難シ四方君子一覧実試以テ其言ノ誣ヒザルヲ知リ玉ヘ

大阪北久宝寺町四丁目　前川源七郎敬白